特101
245

神國教典

天道の卷
人道の卷
祭儀の卷
祭詞の卷
訓言の卷
歌章の卷

270
848

始

○

一初心の人は朝夕に天道の卷人道の卷を讀み覺ゆべし。たびかさなるに隨ひて、おのづから道に到るべし。

一やがて祭儀の卷、祭詞の卷、訓言歌章の卷々を誦みあきらめ、それ〳〵の意を得るに至らば、自ら祭葬の儀式を行ひ、或は人に說き示すことも容易なるべし。

一凡そ斯道を學ばん者は、恐るゝことなく、ためらふことなく、怒り猪の如くに猛進し、疑ふべくば飽くまで疑ひ、信ずべくば飽くまで信ずるの覺悟あるべし。疑ひもせず、信じもせず、或は新しき敎を聞きて、恐れためらふ如き者は、道に入ることなりがたきものなり。

特101
245

神國教典　第一　天道の巻

はじめなきはじめにかみます。かもなくこゑもなく（始無始神座香聲）、かたちもなく、いともくわしくたへにして、おほらにみちみちたまへり。そのみこころのみなかをさして、あめのみなかぬしのおほかみとなづけたてまつる。（形精妙大充満御心眞中指天御中主大神名）

かくなづけたてまつるおほかみは、あめつちのもとつ（斯名大神天地元）

昇
3. 5. 20
内交

おほかみ、おほもとつかみ、よろづのものよろづのこ
大神　大元神　萬物萬
ころのぬしにして、おほぞらはよもやものかぎりなき
心主　虛空　四方八方　限無
かぎり、ゆくすゑはよろづよのをはりなきをはりにい
限　行末　萬代　終無終
たるまで、しろしめさざるところなく、おほきなるは
至　知召　所　大
あめつち、ちひさきはめにみゑぬもののこころにいた
天地　小目見　物心至
るまで、すべをさめたまはざるものなし。さればひと
統治　人
のよとなりては、くにはかはれどおほかみをしらざる
世　國異　大神知

ものなく　なはことなれどおほかみををがみまつり、
名異　大神拜
いつぎまつらざるものなし。ゆゑにまたあめつちの
齋　故　天地
ものつくらすぬしのかみ、よろづのもののつかさの
物造主神　萬物主宰
かみともとなへたてまつる。まことにかみのことわ
神稱　寔神理
りは、このおほかみにはじまりて、このおほかみに
大神始　大神
をはるなり。さておほかみのみたまうごきて、よろづ
終　大神御靈動　萬
のものをむすびなしたまふ。そのあらはれたるをむ
物結成　顯

すびなしたまふみちからをば、たかみむすびのかみ
結成　御力　高御結靈神

とはなづけ、そのかくれたるをむすびなしたまふみ
名　幽　結成　御

ちからをば、かむみむすびのかみとはなづけたてま
力　神御結靈神　名

つる。みなはみつなれども、みたまはひとつの、その
御名三　御靈一

かみわざのみいさをにつけて、かくはことなをよび
神業御德　斯異名呼

たてまつるなり。このみつのみなひとつのみたまの、
三名一靈

くすしくたへなるかみわざは、よのはじめなきはじ
玄妙神業　世

めよりをはりなきをはりまで、つらぬきとほりてか
終無終　貫通

はりたまはず、よのものみなをあらはしかくし、ここ
渝世物皆　現隱

にむすび、かしこにむすび、むすびむすびてものみな
結結　物皆

にいのちをあたへ、あめつちにあやをなしたまふ。ゆ
命天地文

ゑにひとのみち、もののみち、みなこのおほみたまの
人道物理　皆大御靈

みのりにもとづき、ひとつももれたがふことなし。か
御則基一　洩違

くてわがみるあめつちのはじめ、くにわかく、うきあ
我見天地始　宇宙稚浮

ぶらのごとくにして、くらげなすただよへるときに
脂如　海月似　漂蕩
あしかびのごとく、もゐあがるものあり。すなはちあ
蘆芽如　萌騰　即天
めのもとにして、むすびのみたまのみにそむるかた
元　結靈御靈　見初象
ち、めでたふとびうやまひて、うましあしかびひこぢ
愛尊　敬　可美蘆芽日凝
のかみとたたへまつる。つぎにあめのとこだちのかみ
地神稱　天常立神
とは、あめのさかひのとこしへにさだまるかたちを
天體境常　定象
なづけたり。あめのさかひのさだまるとともに、くに
名天體境　定地

のさかひもさだまりぬ。ゆゑにこのつちのはじめの
球境定　故地球始
かみを、くにのとこだちのかみとはなづく。このとき
神國常立　名此時
ただあめとつちとあり、いくよろづよをへてくさき
唯天地　幾萬代經草木
はじめてさかりにもゐいづ。ゆゑにこのときをとよ
始盛萌出　故此時豐
くむぬのかみのみよとなづく。いまだかみびとのか
組野神世名　未神人
たちなし。ゆゑにみみをかくしたまひきとはつたへた
形故御身隱　傳
り。くさきしげりてむしなりいづ。むしなりいでて、
草木蕃蟲生出　蟲生出

うをとりけだもの、さてひとぐさのたねもめばにてさ
魚鳥獸　人草種芽生
かにける。ゆゑにうひぢにのかみ、すひぢにのかみの
榮故初血丹神終血丹神
おんよとはなづけたり。またいくよろづよをへて、つ
御世名幾萬代經
ぬぐひのかみ、いくぐひのかみのみよには、くさきく
茅野咋生咋神世植物
ひいきものくふことのみちそなはり、またいくよろづ
食動物食途備幾萬
よをへて、おほとのちのかみ、おほとのべのかみのお
代經大戸内神大戸邊神御
んよには、ひとはいはやのとをさしまうけ、いへゐを
代人岩窟戸扉設家居
かまへてそのうちにをり、そのかたはらにいではたら
構其内居傍出働
きぬ。またいくよろづよをへて、おもたるのかみ、あ
幾萬代經面足神嗟
やかしこねのかみのおんときにいたりて、はじめて
賢根神御時
ひとのかほかたちそなはり、そのこころねかしこく
人顔貌具心根賢
みちたりて、ここにひさかたのあまつかみ、あらがね
充足天神
のくにつかみのみよにつぎて、なまよみのひとのよは
地神繼人代
じまるべくなりぬ。うましあしかびひこぢのかみより
始可美蘆芽日凝地神

ここにいたる、あめふたよ、くにむよ、あはせてかみ
天二期　地六期　神

よやよ、あめつちのわかれそめてより、ひとのよまさ
代八期　天地剖判以來　人代將

にはじまるにいたるまで、そのよろづよのかずをしら
始　萬代數知

ず、みなあめのみなかぬしのおほかみふたむすびの
天御中主　大神二結靈

おほみたまの、くすしくたへなるかみわざなるを、そ
大御靈　玄妙神爲

のみよみよのさまをたたへて、かくはことなをつけま
時期形狀稱　別名命

つれるなり。かくあめつちよろづのものは、みなむす
天地　萬物結靈

びのおほみたまのかみわざによりてなりいで、ぬしの
神爲　發生主

おほかみのみこころによりてあらはれたるものなれ
大神御慮　出現

ば、すなはちおよそものみなはぬしのおほかみのわか
則凡物皆　主大神分

れみなり。ぬしのおほかみのわかれみなれば、あひて
身主大神　分身合

はもとのおほかみにかへる。ましてやひとはおほかみ
元大神還　況人大神

の、いとをしみますまなごなれば、みおやのかみの
最愛愛子　祖神

おほみこと、おほみこころにだにそむかず、かみのま
大命大御心　反神眞

ことのみちをしまもらば、こころもやすく、みもたひ
道　守　心　安　身　平
らかに、いきてはかみのさいはひをかうむり、みまか
生　神　幸　福　蒙　死
りてはとことはに、おほかみのみもとにたのしくあ
常　大　神　御　許　樂
らむ。さればひとたびみちにかへりて、おほかみにつ
一　度　道　歸　大　神
かへまつらむものは、おそるることなく、うれふるこ
仕　恐　憂
となく、なげくことなく、うらむることなく、まどふ
歎　怨　惑
ことなく、わづらふことなく、ひにもやかれず、みづ
煩　火　燒　水

にもおぼれず、くらはざれどもうることなく、きざ
溺　食　飢　着
れどもこごゆることなく、やいばにもきずづかず、や
凍　刃　傷
まひにもいたづかず、こころもみもすがすがとして、
疾　病　心　身　清　清
つねにきよくあきらけく、こゑなきにもよくきき、か
潔　皎　聲　無　能　聽
たちなきにもよくみ、おもふところ、なすところ、よ
形　無　能　視　思　爲
ろづこころのままならむ。これあめつちはかみのみく
萬　意　隨　宇　宙　神　國
に、ひとはかみのまなごにして、ひとたびみおやのみ
人　神　愛　子　御　祖　神

こころにかなへば、あめつちはみなそのものとなれ
慮 合 天 地 皆 其 有
ばなり。ああはれかみのまなごのわれひと、かみのま
神 愛 子 我 人 神
ことのみちをあきらめ、かみのわかれみとおもひしり
眞 道 明 神 分 身 思 知
ては、ふつときたなきこころをさりて、みはうつそみ
穢 心 去 身 現 身
のうきよにありとも、こころはかみのみもとにかよひ
浮 世 在 心 神 御 許 通
て、かみのこころにならざらめやも。あなたふと、あ
神 心 嗟 貴 嗟
なかしこ。
賢

大正元年八月十四日伊勢にて作成
太廟大前に奏上し奉る

國體淵源 神人傳統圖

石版摺竪一尺九寸横一尺四寸
説明付○實費五錢、郵税二錢

宇宙の大元より國體の淵源皇德皇權の由來を闡明し諸册二尊が建國の大祖たると同時に修理固成の人道の開祖我神國の教祖にて座すことを論じ天照皇大神より神武明治の大天皇を經降りて當今の御宇に及び萬世一系帝國の皇位が天壤無窮なる所以を一目の下に瞭然たらしむ天道の卷人道の卷と共に國民必ず座右に備ふべきの寶典なり

神國教典　第二　人道の卷

かくおもたるのかたちそなはり、あやかしこねのかし
斯面足顔貌具　嗟賢根賢
こくなりて、つぎにあれませるいざなぎのみこと、い
次生　率先男尊
ざなみのみこと、ふたばしらのおほかみのみよには、
率先女尊　二柱　大神御代
はやちはやふるかみよにつぎて、なまよみのひとのみ
神代繼　人道
ちはじまるべくなりぬ。ここにあめのみなかぬしのお
始　天御中主大

ほかみ、もろもろのみことも(神諸命)ちて、いざなぎいざなみ(以率先男率先女)ふたばしらのみことに(二柱尊)、このただよへるくに(漂蕩地)をつくり(修理)かためなせとのりごち(固成詔)て、あめのぬぼこをたまひて(天玉矛賜)、ことよさしたまひき(事依給)。これあめのみなかぬしのおほかみ(天御中主大神)、むすびのおほみたまの(結靈大御靈)まにまに(隨)、かみひとのま(神人當)さにつとむべきみちなればなり(務道)。ここにふたばしらの(二柱)おほかみ、みおやのかみのみことにしたがひて(大神御祖神詔命從)、おや(親)

につかふるのみちをしめしたまふ(事道示)。ゆゑにひとのみち(故人道)は、おやにつかふるにはじまる(親事始)。またみおやにつかふ(御祖事)るのみちは、さながらめにみにぬかみにつかふるのみ(道即目見神仕)ちなり。ゆゑにひとのみちは、めにみにぬかみにつかふるをむねとす(故人道目見神仕)。かくてふたばしらのおほかみ、みおや(主二柱大神御)のかみのみことかしこみ、あめのうきはしのみふね(祖神詔命畏天浮橋御船)にのりて(乘)。わだのはら(海原)、しほこをろこをろにかきなし(搔鳴)

て、こぎゆきたまへば、やがておのころじまにつきたまふ。このしまにとどまりまして、あめのみはしらをみたて、やひろどのをみたててすみたまひ、すなはちめをとのちぎりをさだめたまふ。ゆゑにひとのみちはおやこのつぎにめをとあるなり。めをとのちぎりをなすのゐやは、をとこまづことあげして、をみなこたふるをただしとす。このゐやなきはみちにそむけり。ゆゑにふたばしらのみこと、はじめこのゐやをあやまりて、みこふさはず、かみにまをしてそのあやまりをしり、あらためてゐやをただしたまへり。もてめをとのちぎりのおきてをたて、またひとのちからこころのたらざるところは、めにみにぬかみによるのならはしをしめし、あやまりは、ただちにこれをあらたむるのみちををしへたまふ。これよりふたばしらのおほかみ、

自凝着　天御柱　住乃　人道　夫婦約定　父子次夫婦　禮男先發言　女和　正禮　無道反

二柱尊　初禮誤　御子不良神　告誤知　改禮正　以夫婦　約掟立　人心足　目見　神頼習　示誤直　改道　教

みこころをひとつにし、みちからをあはせて、ちか
御心 一 御力 合 近
きとほき、しまじま、くにぐに、おほやしまぐにをま
遠 島 國 大八洲國
きめぐり、はかりさだめたまひ、つちしるみこ、かね
求 巡 經 營 土知御子 金
しるみこ、みづしるみこ、きくさしるみこ、ひしるみ
知 水知 木草知 火知
こ、やましるみこ、うみしるみこ、いへしるみこ、ふ
山知 海知 家知 船
ねしるみこ、かぜしるみこ、あまたのみこうみ、たみ
知 風知 數多御子生 民
をそだて、もろもろのわざをひらき、くさぐさのもの
育 諸 技 開 種 物

をつくりいでたまふ。すなはちゐるところのものは、
造 出 居 所
いへゐとのづくり、きるものは、かうむり、ころも、
家 居 殿 造 着 冠 衣
も、はかま、おび、ひも、かざるものは、かづら、
裳 袴 帶 紐 飾 鬘
くし、たまき、くびだま、はむものは、やまうみさと
櫛 手 纏 頸 珠 食 山 海 里
の、かずかずのもの、せめまもりたたかふうつはもの
數 物 攻 守 戰 器
は、つるぎ、たち、ほこ、ゆみ、や、ことごとくそな
劒 刀 矛 弓 箭 悉 具
はり、かがみもあり、つゑもあり、ゆくにみちあり、
鏡 杖 行 道

わたるにふねあり、ひなもあり、みやこもあり。ひと
渡船鄙都人
しぬれば、なきかなしみて、なきがらを、つちふかくか
死泣悲遺骸土深隱
くしはふむり、けがるればうしほのみづに、みそぎき
葬汚潮水身漑
よむるゐやも、みなこのおほみよにさだまりぬ。もと
淨禮皆大御代定
よりもとつおほかみのみことをもちて、このただよへ
元大神命漂蕩
るくにを、つくりかためなしたまへることにしあれば、
國土修理固成
すなはちふたばしらのおほかみは、このくにのつく
則二柱大神此國經
りぬし、つかさのかみにましまして、このことわりよ
營主主宰頭此理
り、このくにには、きみとたみとのみちもけぢめ
此邦君民道別
も、おのづからにさだまれり。ゆゑにふたばしらのお
自定二柱
ほかみのみよを、ひとのみちのはじめとなし、かむな
大神御代人道始神
がらよろづよの、すゑのすゑまでかはりなき、すめら
隨萬代末末渝皇
おほみちの、かたちにあらはれしもととはするなり。
大道形容現元
かくつくりたまへるよものくにを、あめつちのむだと
經營四方國天壤無窮恒

こしへに、つたへつぎしらせむとて、いやはてにみはしらの、うづのみこをうみたまふ。あまてらすおほみかみ、つくよみのみこと、たけはやすさのをのみことこれなり。このときいざなぎのおほかみ、いたくよろこばしてのりたまはく、あれはみこうみうみて、うみのはてに、みはしらのうづのみこをえたりと、のりたまひて、すなはちそのみくびたまのたまのをもゆらに、

久傳繼所知　最後三柱　天照大御貴御子生　神附夜見尊猛捷進雄尊　牽先男大神大歡　詔吾子生生生　終三柱貴子得　詔乃御頸珠玉緒搖

とりゆらかして、あまてらすおほみかみにたまひてのりたまはく、ながみことは、たかまのはらをしらせと、ことよさしたまひき。つぎにつくよみのみことは、よるのをすくにをしらせ、たけはやすさのをのみことは、うなばらをしらせとのりたまひき。ここにたけはやすさのをのみことは、よさしたまひしくにをしらさず、いたづらになきすさびておはしければ、ちち

取搖天照大御神賜　詔汝尊高天原所知　事依夜食目所知　附夜見尊　尊海原所知　捷進雄尊　依國所知無爲泣荒父

おほかみいかりたまひて、なはこのくにになすみそと
大神怒　汝此國勿住
て、かむやらひにやらひたまひき。おやのみことにした
神追追放　親命令
がはざる、このつみこここにのりしめされぬ。すさのを
從子罪　宣示　進雄
のみこと、あまてらすおほみかみにまをしてまかりな
尊天照大御神請暇將罷
むとて、たかまのはらにまゐのぼります、そのさまさ
高天原參上　其狀
はがし。おほみかみ、みことのこころをうたがひお
騷擾　大御神尊　心疑
ぼして、をがみのかたちにみをよろひて、いつのを
思男神形御身鎧嚴雄

たけびふみたけびてまちたまふに、みことあだこころ
哮踏哮待　尊他意
なきよしをまをして、うけひてみこうみ、みうたがひ
白誓子生御疑
をはらしぬ。ここにすさのをのみこと、あれかちぬと
晴進雄尊吾勝
いひて、かちさびに、おほみかみのみつくだをやぶり、
勝荒大御神御作田破
いみはたやをこぼち、あはなち、みぞうめ、いきはぎ
忌服屋毀畔放溝埋生剝
さかはぎ、くそへここだくのつみををかしたまひけ
逆剝屎戻許多罪犯
れば、あまてらすおほみかみかしこみて、あめのい
天照大御神見畏天石

はやどをたてて、さしこもりたまひぬ。すなはちた
屋戸　扇　籠　乃
かまのはらみなくらく、あしはらのなかつくにことご
高天原皆暗　葦原中國悉
とくくらし。これによりてとこよゆく。やをよろづの
闇　常夜往　八百萬
みたみ、うれへなげきて、あめのやすのかはらにつど
神民憂歎　天安河原集
ひ、かたらひはかりて、こころをくだき、わざをつく
談議心碎行盡
して、なげきねぎのみたてまつりければ、やがていで
歎願禱奉　即出
まして、もとのごとくによをてらししらせたまふ。お
御世照所知

よそことあるにあたりては、くにたみことごとくひと
凡事有方　國民悉一
つこころになりて、ただひとすじに、おほきみをたの
心唯一筋大君賴
みたてまつること、まづこのときにあらはれぬ。ここに
奉先此時顯
もろもろ、たけはやすさのをのみことのつみをことわ
諸猛捷進雄尊罪斷
りさだめて、ちぐらのおきどをおほせ、またひげをき
定千座置戸課髯剪
り、つめをぬきて、かむやらひにやらひをはりぬ。す
爪拔神追追放畢
なはちいかなることありとも、くにたみはただひと
即如何國民唯一

つ、ただしきひつぎのおほきみにつかへたてまつり、
正統　大君　仕
もしおほきみにゐやなきものは、たふときすめらみう
若大君　禮無　者　貴　皇族
からといへども、つみなはるべきことあきらかになり
處刑　明
ぬ。これよりすさのをのみことも尊すなほになりて、
進雄　尊　直
しもつくににくだりていさををたて、はるかにおほみ
下國　降　功樹　遙　大御
かみにつかへたてまつり、そのみこおほくにぬしのみ
神　仕　奉　御子大國主
こと、つくりしくにをすめみまのみことにかへしたて
命　經營國土　皇孫尊　還奉
まつりて、ももたらずやそくまでにかくりて、さむら
百不足八十坰手隱　侍
ひつかへまつりける。みなないざなぎいざなみふたばし
仕　皆　率先男　率先女　二柱
らのおほかみのつくりかためて、うづのみこ、あまて
大神　修理　固成　貴御子　天
らすおほみかみにつたへたまひしくになれば、すなは
照大御神　傳　國土
ちおほみかみのみことのまにまに、かへしたてまつる
大御神　敕　隨　還奉
べきことわりによれるなり。かくてあまてらすおほみ
道理　由　斯天照大御
かみ、すめおほかみのみはるかしますよものくには、
神皇大神見晴四方國

あめのかきたつきはみ、くにのそきたつかぎり、あを
天垣立極　地立限　青
ぐものたなびくきはみ、しらくものおりゐむかふすか
雲靉靆極　白雲降居向偃
ぎり、あをうなばらはさをかぢほさず、ふねのへのい
限青海原　棹舵乾　舟艫
たりとどまるきはみ、おほうなばらに、ふねみちつづ
至留極　大海原　船充續
けて、くがよりゆくみちは、にのをゆひかためて、い
陸行道　荷緒結固
はねきねふみさくみて、うまのつめのいたりとどまる
磐根木根踏　馬爪至留
かぎり、ながちひまなくたちつづけて、さきくにはひ
限長道　立續　狭國
ろく、さかしきくにはたひらけく、とほきくにはやそ
蜜峻　平　遠國八十
づなうちかけて、ひきよすることのごとく、たひらけ
綱打掛　引寄　平
くやすらけくしろしめせと、よさしまつらば、あめが
安統治　依　天
したに、まつろはぬくになく、みくらゐはあめつちの
下服從國　皇位天壤
むだとこしへに、さかえまさむと、かのみくさのかむ
無窮永久榮　三種神
だからをたまひて、すめみまのみことにことよさした
器賜皇孫尊事依
まひき。すめみま、あめにぎしくににぎしあまつひだ
皇孫天饒地饒天津日高

かひこほのにぎのみこと、すなはちつくしのひうが
彦大饒饒尊　乃筑紫日向
のくににくだりまして、にしのくにぐにををさめたま
國降　西國國治
ひ、としあまた、みよいくよをかさねたまひぬ。ここ
年數多　御代幾代重
にかむやまといはれびこのおほきみかど、たかちほの
神武大天皇　高千穗
みやにましまして、はかりたまはく、いづれのところ
宮座　議　何
にまさばか、あめがしたのまつりごとをば、たひらけ
座　天下　政事　平
くきこしめさむ、なほひむがしのかたにこそいでまさ
聽召　尙東　方行幸
めとのりたまひて、すなはちひうがよりたたして、く
詔　乃日向發國
にぐににあらぶるひとどもをことむけやはし、まつろ
國荒　懷柔服從
はぬものどもをはらひたひらげたまひて、やまとのう
攘平　大和畝
ねびのかしばらのおほみやどころにましまして、あめ
火白檮原天宮　所座天
がしたしろしめしたまひき。しかりしよりこのかた、
下統治　自爾以來
みよみよのすめらみこと、あまつひつぎをうけたまひ
歷世天皇　皇位
て、はじめもなく、をはりもなき、ひさかたのあめの
始　無終　悠久天

みち、かむながらのひとのみちを、いやつぎつぎにお
道　神隨　人　道　彌繼繼推
しひろめ、つくりかためなしたまひ、わきてあづまの
擴　修理固成　別　東
おほみやどころに、あめがしたしろしめししはじめの
大都　天下統治最初
おほきみかどにいたりまして、おほきにうちとのまつ
大皇帝　大內外政
りごとをあらためととのへたまひ、よきをとりあしき
事釐革整齊善取惡
をすてて、ひのもとを、くにのよきくに、まほぐにとな
捨日本國吉國眞大國
し、みみづからかむながらのおほみちをみちたらはし
御躬親神隨大道具足

て、きみのかがみひとのかがみと、しきしまのやまと
君鑑　敷島日本
だましひを、かたちにあらはししめしたまひぬるぞ、
魂　形體現示
たふとくもまたありがたき。すめらみすゑのいやさか
貴　有難皇子孫彌榮
にさかえたまひ、あまつひつぎのあめつちのむだと
榮皇位天壤無窮
こしへならむこと、いざたなぎいざなみふたばしらのみ
永久　率先男率先女二柱
ことの、ことはじめたまひて、あまてらすおほみかみ
尊事始天照大御神
の、のりわけたまひしところなり。かくてあめのみち
詔別天道

はむすびむすぶ、ひとのみちはつくりかためなすにあ
結結　人道　修理固成
ること、やまとのくににあきらかになりぬ。あめのみ
大日本國明白　天
ちにはところもなくときもなし。むかし、いま、とほ
道所無時無　昔今遠
き、ちかきのけぢめあらむや。ひとのみちは、ときに
近差別　人道時
より、ところによりてしなあるべし。されどこのただ
所差　漂
よへるくにをつくりかためなせとの、かみのみこと
蕩國土修理固成　神勅
は、いづれのよにもいづれのところにも、ひとしくあ
孰世何　所等天
めよりあたへられたるものにしあれば、すなはちこれ
與　則斯
のおほみちは、ときよのきはみ、くにところのかぎり
大道　時世極　國所限
にほどこして、あやまりたがふことなからむ。そもそ
施　誤違　抑
もおよそものみなは、ぬしのおほかみのわかれみな
凡物皆主　大神分身
り。ぬしのおほかみのわかれみなれば、あひてはもと
主大神分身　合元
のおほかみにかへる。ましてやひとはおほかみの、い
大神還況　大神
とをしみますまなごなれば、みおやのかみのおほみこ
最愛愛子　御祖神大御

と、おほみこころにだにそむかず、かみのまことのみ
敕 大 御 慮 背 神 眞 道
ちをしまもらば、こころもやすく、みもたひらかに、
守 心 安 身 平
いきてはかみのさいはひをかうむり、みまかりてはと
生 神 幸 蒙 死
ことはに、おほかみのみもとにたのしくあらむ。され
永 久 大 神 御 許 樂 在
ばひとたびみちにかへりて、おほかみにつかへまつら
一 度 道 反 大 神 仕
むものは、おそることなく、うれふることなく、な
恐 憂 歎
げくことなく、うらむることなく、まどふことなく、
怨 惑

わづらふことなく、ひにもやかれず　みづにもおぼれ
煩 火 燒 水 溺
ず、くらはざれどもうることなく、きざれどもこご
食 飢 着 凍
ゆることなく、やいばにもきずづかず、やまひにもい
刃 傷 病
たづかず、こころもみもすがすがとして、つねにきよ
痛 心 身 清 清 恒 潔
くあきらけく、こゑなきにもよくきき、かたちなきに
皎 聲 無 能 聽 形 無
もよくみ、おもふところ、なすところ、よろづこころ
能 視 思 所 爲 所 萬 心
のままならむ。これあめつちはかみのみくに、ひとは
隨 宇 宙 神 國 人

かみのまなごにして、ひとたびみおやのみこころにか
神愛子　御祖神慮
なへば、あめつちはみなそのものとなればなり。ああ
合天地皆其有
はれかみのまなごのわれひと、かみのまことのみちを
神愛子我人　神眞道
あきらめ、かみのわかれみとおもひしりては、ふつと
明神分身　思知
きたなきこころをさりて、みはうつそみのうきよにあ
穢心去身　現身浮世在
りとも、こころはかみのみもとにかよひて、かみのこ
心神御許　通神
ころにならざらめやも。あなたふと、あなかしこ。
心　嗟貴　嗟賢

大正元年八月十四日伊勢にて作成
太廟大前に奏上し奉る

神國教典　第三　祭儀の卷

第一章　總則

一　祭儀を別ちて、神祭式、神社祭式、靈祭式、並に葬儀式とす。

二　神祭式は、大元神天御中主大神の祭祀に用ゐるものとす。吉凶諸祭、祈禱、及び歸敎祭、鎭魂祭、結婚祭等、皆此の部に屬す。

三　神社祭式は、國祖二大神(率先男率先女二尊を指し奉る)以下、大小神社の祭祀に用ゐる。

四　靈祭式は、家々祖先の靈祭に用ゐる。但大旨神社祭式に準ずるものとす。

五　葬儀式は、死者葬送の儀式なり。且一個年祭までの靈祭は、皆此の部に屬するものとす。

六　凡そ神拜には、八拍手、並に忍手一回を用ゐ、又重要なる祭儀には玉串祓を行はしむ。

第二章　神祭式

七　大元神には社殿なし。唯拜殿若くは齋場を設けて之を祭祀す。但拜殿は兼ねて講堂に充つるものとす。

八　神祭の種類を、例祭、臨時祭、特別祭とす。

例祭は、年始、半年末、年末、月始、月中、月末、とし、臨時祭、特別祭は、其の必要の時々之を行ふ。

九　神祭の次第、左の如し。

ア　序詞

イ　天道の卷

ウ　人道の卷

但式の前後に奏樂するものとす。

一〇　歸教祭、鎮魂祭は、鎮魂殿に於て之を行ふ。

鎮魂殿は、古式に據りて建造し、且目標として神鏡を掲ぐることを得るものとす。

結婚祭は、鎮魂殿若くは家々祖靈の前にて之を行ふ。

一一　歸教祭の次第左の如し。

ア　序詞

イ　天道の卷
ウ　人道の卷
エ　訓諭
オ　宣誓

一二　鎮魂祭の次第左の如し。

ア　序詞
イ　天道の卷
ウ　人道の卷
エ　訓諭

一三　結婚祭の次第左の如し。

ア　序詞
イ　天道の卷
ウ　人道の卷
エ　宣誓

第三章　神社祭式

一四　神社祭式は、神社に於て之を行ふ。

一五　神社祭式には、神酒及び簡素清潔なる神饌を供す。但し時宜に依り、之を供せざることあり、且供撒を以て曲を爲すことを止む。

一六　神社祭式の次第左の如し。

ア　序詞
イ　天道の卷

ウ　人道の卷

エ　祝詞

一七　祭官が、其の神社特有の式に依り、祭祀を爲すものは、此の規定に據るの限に在らず。

第四章　靈祭式

一八　靈祭式は、其の家々に於て之を行ふ。

一九　靈祭式には、時物若くは其の生前の嗜好物を供す。

二〇　靈祭式の次第左の如し。

ア　序詞

イ　天道の卷

ウ　人道の卷

祭文を讀む者あるときは、天道の卷の次に於て之を爲さしむ。

第五章　葬儀式

二一　葬儀の祭祀を左の各種とす。

ア　安定祭

イ　棺前祭

ウ　埋棺祭

エ　歸家祭

オ　埋棺翌日祭

カ　七日祭

キ　二七日祭
ク　三七日祭
ケ　四七日祭
コ　五七日祭
サ　六七日祭
シ　七七日祭
ス　百日祭
セ　一年祭

二二　安定祭は死亡の時、棺前祭は出棺の前、埋棺祭は葬送の時、歸家祭は葬送後歸家の折に、各之を行ふ。

七日祭以下の日數は、死亡の當日より之を起算す。

二三　凡そ葬儀は、清素謹嚴を旨とし、浮華虛飾に亘ることを禁ず。

葬列は、柩、銘旗、神位、勳章、劍、鏡、各一、並に一木（根越榊の類）二燈の外、漫に異物を加ふるを得ず。但其の身分に依り、特定の式あるものは、此の限に在らず。

葬儀には生鮮を供せず。

二四　埋棺祭の次第、左の如し。

ア　序詞
イ　天道の卷
ウ　人道の卷
エ　誄詞（喪主又は祭主）
オ　弔詞（會葬者）

カ　生死の文
キ　禮　拜（玉串を用ゐる）

二五　自餘諸祭の次第左の如し。

ア　序　詞
イ　天道の卷
ウ　人道の卷
エ　生死の文

第六章　附　則

二六　祭服は本教の定むる所に依る。但當分の間普通禮服若くは神職の祭服を以て之に代用することを得。

二七　樂は本教祭樂の創定あるまで、從來の神樂雅樂若くは洋樂を通用す。

二八　諸祭式に於ける、天道の卷、人道の卷の讀誦は、時宜に依り數回之を反覆し、若くは其の一方を省畧することを得。

二九　葬儀に、放鳥、生花、造花、花環等を用ゐるを禁ず。

神國教典　第四　祭詞の巻

祭儀の巻　第二章

一　神祭式序詞　同前

茲に天地の大元神天御中主大神の御前に、何々の御祭仕へまつることを、大神平けく安らけく、聽召せと、祭主何某畏み畏みも白す。

二　歸教祭鎭魂祭序詞　同前

茲に天地の大元神天御中主大神の御前に、何某歸教（又は鎭魂）の祭、仕へまつることを、大神平けく安らけく、聽召せと、祭主何某畏み畏みも白す。

三　歸教祭宣誓　同前

茲に天地の大元神天御中主大神の御前に、何某歸教の祭仕へまつりて此の靈魂の在らむ限り、大神の御心に違ふことあらじと、誓ひ奉ることの由を、大神聽召せと白す。

四　結婚祭序詞　同前

茲に天地の大元神天御中主大神、二結靈の大御靈、並に率先男、率先女、二柱大神、天照大御神、何家祖宗累代の尊靈、某家祖宗累代の尊靈の御前に、何某、何某、結婚の祭仕へまつることを、大神達、尊靈達、平けく安らけく、聽召せと、祭主何某畏み畏みも白す。

五　結婚祭宣誓　同前

茲に天地の大元神天御中主大神、二結靈の大御靈、並に率先男、率先女二柱大神、天照大御神、何家祖宗累代の尊靈、某家祖宗累代の尊靈の御前に、何某、何某、結婚の祭仕へまつりて、此身の限り靈魂の限り、夫婦の正しき道を守り、大神の御心に違ふことあらじと、誓ひ奉ることの由を、大神たち尊靈たち、聽召せと白す。

備考　祭主宣誓詞を代讀する場合に於ては、新夫新婦をして、各自署名せしめ、若くは拇印を捺せしむべし。

六　神社祭式序詞

茲に何々の神靈の御前に、何々の御祭仕へまつることを、平けく安らけく聽召せと、祭主何某敬ひ畏みて白す。

七　靈祭式序詞　祭儀の卷第四章

茲に何々尊靈の御前に、何々の御祭仕へまつることを、平けく安らけく聽召せと、祭主何某敬ひ畏みて白す。

八　埋棺祭序詞　祭儀の卷第五章

茲に何某命の遺骸を、これの奥城にかくしまつり、とことはに鎮めまつることの由を、尊靈平けく安らけく聽召せと、祭主何某敬ひ畏みて白す。

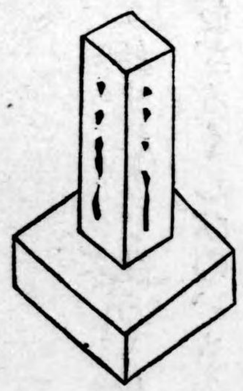
九　自餘諸祭序詞　同前

茲に何某命の尊靈の御前に、何々の御祭仕へまつることを、平けく安らけく聽召せと、祭主何某敬ひ畏みて白す。

備考　死者の稱號は、男子には彦、女子には媛を加へ、末に命を附す。但何彦某郎の如く、既に男子たるの表語を有する者は、彦を加ふるの限に在らず。

例　井口丑二彦命
　　井口宮居媛命

神位の形



木製方柱形

一〇　生死の文　同前

抑死ぬるといふことは、生るゝときより始まれり。生るゝ故に死ぬるなり。身は千萬の數知らず、目にも見ざるくしびの、ものより成りて、その物は、しばしもやまず變りゆく、その往來は生死にて、來るは即ち生るゝなり、往くは即ち死ぬるなり。往くこと少く來ること、多きときには身は榮え、往くこと多く來ること、少きときは、身衰ふ、年老いぬれば往來少く、いたづきぬれば往くこと多し。終に往來の止まりぬれば、うつそ身の命こゝに盡き、繫ぎし玉の緒も絶えて心と身とは長く離れ、おの〳〵往くべき處に向ふ、これ一生の終りにて、よのつねにいふところの死なり。されば大凡世の中に、生きとし生ける物皆は、その成りいでし初めより、朝な夕なのときときに、小さき生死を繰返し、繰返しつゝ此の生死の、終りに大なる死に就くなり。されど天の道はむすびむすぶ、結靈の御靈の神業にて、消えては結ぶうたかたの、消ゆと見ゆるも結ぶなれば、終りは即ち始めなり、此處に死ぬるは彼處にて生るゝものと知られたり。さて終りなき苧環の繰返しゆくそのなかに、つよき身は長く活き、つよき靈魂は永く留まる。善き靈魂は常に樂しみ、悪しき靈魂は常に苦しむ。この世にもかの世にも、神の眞の道を聽きて、順ふ者は常に安く、逆らふ者は常に危ふし。されば命の内の務は、暫しが程も道を學びて、神の教に順ふに在り。又亡き人を弔ふの途は、其の靈魂に道を聽かしめ、その名の爲に諸々の、善き功德を積むに在り。然らば生きては此の世に安く、

死にては彼の世に樂しくあらむ。

生死固より二つ無し。生死固より二つなし。人神豈別あらむや。既にこの理りを諦めたらむ輩は、生死に臨みて恐るゝことなく、憂ふることなく惑ふことなく、急ぐことなく後るゝことなく、唯平けく、安らけく、神の慮のまにまに在らむ。その靈魂は常盤に樂しみ、その家族親族は、永く現し世の幸福を享けむ。嗟尊きかも。嗟賢きかも。

アメツチミナカミ　ミナカノオホカミ

一、以上各種の祭詞と、天道の卷、人道の卷とを、別冊祭儀の卷所定の順序に依りて組合はすれば、人間一代吉凶諸祭、悉く皆執行し得られ、一も備はらざるものなし。

一、祭服は上古神代の制に則りて之を定む。但服地は麻布に限る。

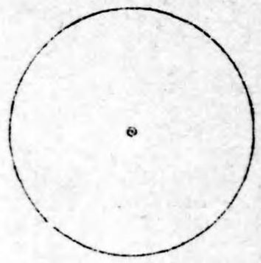
一、笏若くは中啓を持たず、長柄の銅鏡を携ふることとす。

一、柩櫃にも亦制あり、要は簡樸謹嚴を貴ぶに在り。

一、教職は教長の外司教正教補教の三種とす。

神章

八字八字の標號



アメツチミナカミ　ミナカノオホカミ

○

ムスヒテムスヘヤ　ツクリテカタメヨ

行狀十五則

一徳　信

二戒　勿害　勿欺

三訓　報本　愛物

四止　止怨　止貪　止醉　止淫

五行　義　勇　勤　倹　讓

續末

○天道は結び結ぶ、人道は修理固成す。而して此の二道は一旨なり。

○宗教は確定す、科學は假定す。假定は動く、確定は動かず。

○宗教は信に據つて理を含み、科學は實に據つて理を見る、信理具はりて宗教尊く、理實合ひて科學全し。

○科學は人智の尺度なり、宗教は人信の極致なり。信は宇宙の全體なり。

○汝之を信ぜよといふ、大人は信ず、中人は信ぜず、小人は信ず。小人は迷ひて信ず、理非を知らず。中人は疑ひて信ぜず、疑ふは知の初なり、將に理を知りて之を信じ、非を知りて信ぜざらんとす。大人は悟りて信ず。理非を絶す。

○信教は強ふべきものにあらず。

○世に萬古不易の者なし、唯神を萬古不易とす。
○科學に萬古不易の者なし、唯數を萬古不易とす。
○物盡きて心あり、心極まりて神あり。神は大精なり、大誠なり。
○分子を分つて原子とす、原子を分つて電子とす。電子を究むれば終に精を得、精は誠なり、誠を究むれば靈を得、靈は即ち神なり、無始無終無邊無際、時間空間に充滿す。
○物皆心あり、物皆生命あり。
○智は權なり、義なり。
○最高の智ある者、最高の權義あり。最も苦樂を知る者、最も苦樂を選ぶの權義あり。動物に對する人類の如き是なり。
○自利は利他なり、利他は自利なり、利地なきの自利は自利に非ず自利なきの利他は利他に非ず。
○身を殺して仁を爲す者は、先其の身を有せざるべからず、有せざるの身を殺して、以て己の仁を爲すは賊に非ずや。
○書は塵芥なり。
○多く書を讀むは塵芥を探るが如し。
○塵芥は燒きて肥料とすべし、書は亦心を養ふに足る。
○信ずれば神あり、信せざるも神あり、神を信ずる者は常に安く、神を信ぜざる者は常に危し、大に信ずる者は大に安く、少か信ずる者は少か安し。
○自ら安き者は人を安んじ、自ら危き者は人を危うす。
○政府は之を信ずる者も信ぜざる者も、等しく之を護る。然れども

信ぜざる者は安んずること能はず。

○船長は其の己を信ずる者も信ぜざる者も等しく之を運ぶ。然れども唯信ずる者のみ、難に遭ふも迷はず意を安んずることを得。

○人生に處しては、始よりして大志ある勿れ、小志よりして大志に至れ。

○小志ある者は生涯喜び、大志ある者は生涯憂ふ。

○獨り神道に對しては、志須らく遠大なるべし。幸福之に隨ひて大なればなり。

○人皆悉く大臣大將たること能はず。人皆悉く神たるを得。人生には成敗あり、神道には成さんと欲して成らざることなし。

○世界は共食なり、同類其者を食ふを野蠻とし、同類の生産したるものを食ふを文明とす。己の物を以て之に代ふるを道とし、無償にて取るを賊とす。

○物あれば敵あり、敵あれば味方あり。

○病あれば藥あり、藥あれば毒あり。

○日本にては先づ君ありて民を育てぬ。他國にては民ありて而して後に君を立てたり。

○日本にては忠君愛國相同じ。他國にては別なることあり。

○修理固成の業、二尊之を子孫に傳へ給ふ。故に人の務は修理固成に在り、其の身を修理固成し、其の家を修理固成し、其の鄉を修理固成し、其の國を修理固成し、其の時代を修理固成し、末代を修理固成す。

○用ゐる者をして選ばしめよ。

○途窮まらば上より觀よ。

○火を敬せざれば火の罰を受け、水を敬せざれば水の罰を受く。人倫に於ても亦斯の如く、親を敬せざれば親の罰を受け、君を敬せざれば君の罰を受く。夫婦兄弟朋友皆同じ。

○自覺したりと稱する者は、未だ自覺せざる者なり。神の懷に入りたるとき、始めて自覺したりと謂ふべし。

○生ながら神に歸る者あり。死しても神に歸らざる者あり。

○宜しく活生活死すべし。

○神道は生々生々なり。

○人は皆自ら其の才を足れりとし、其の財を足らずとす。唯神道に入りたる者、其の德を足らずとす。是足るの初なり。

○道に志す者は、先赤裸になりて來れ。

○飾は身に遠きを大なりとす。小は身を飾り、中は鄕を飾り、大は國を飾り、最大は世界を飾る。

○初は身に刺青し、次は皮膚を塗り、次は衣を染め、髪を形づくり、次は冠を彩り履に刻む。

○裸虫は身を飾り、羽虫は羽を飾り、禽獸は羽毛を飾る。

○身に刺青し、皮膚を塗るは裸虫を學ぶなり。衣を染め、髪を形づくるは、羽虫禽獸を學ぶなり。冠を彩り履に刻むに至りて、始めて人の異なるを見る。

○磨くことは近きを先とす。心を磨くに始まりて時代を磨くに終

る。善く心を磨く者、終に光を萬世に放つ。

○新しきものを飲食すべし。

○善く働き善く眠れ。

○勞れて後に憩ふべし。

○心身はすべて神に任せよ。

○凡そ物は神の物なり。

○猥に用ゐることを得ざれ、破り損ふことを得ざれ。

○病の事は醫に議れ、養生は自らせよ。

○言語文章元二なし。文章を言語と思ひ、言語を文章と思へ。

○神に不淨なし、人に不淨あり。神は人の不淨を受けず。

○神に神社なし、人に神社あり。

○神社を敬ふの禮は、貴人を敬ふの禮に同じ。

○拍手の禮は他意なきを示す。合掌跪拜は降伏を表す。

○他意なきは純潔至誠なり。降伏には枉屈あり。亦虚僞もあり。

○拍手は淡々泊々たり。合掌跪拜は哀々たり。怏々たり。

○神を誤る者は孔子なり、道を誤る者は孟子なり。孔子は神と人とを離間し、孟子は人と道とを分離せしめたり。

○支那に於て、仁義道德は唯紙の上に在り。人の上に在らず。

○凡そ世に眞に驚くべきことなし。人は唯原因結果の連絡の隱れたるときに驚くのみ。

○有形無形相同じ。唯人假に名づくるのみ。

○天に善惡なし、唯循環の理は白を白に還し、黑を黑に返す。人

其の白を善と名づけ、其の黑を悪と名づく。而して其の大本は二結靈の靈動なり。

○風を見るには梢を見よ。雨を見るには傘を見よ。其の見易きものを以て、其の見難きものを見る。

○金を遣ふこと少くして、人を使ふこと多き者は、能く終を全うすること鮮し。

○衣食住は、時の風俗に從ふべし。但不合理なるものは、人に率先して改良すべし。

○唯祭事には古を尚ぶ。

（以下嗣出）

神國教典　第六　歌章の巻

第一番　はじめなき

下はじめなき

中はじめにか下みはましませり

中かもなくかたちこゑもなく

いと下もくわしくたへにして

中おほぞらにみちみちたまふ

その下みこころのみなかをば

あめのみなかのぬしのかみ
　ぬしのおほかみとまをすなり
さておほかみのおほみたま
　うごきてものをむすびなす
たかみむすびかみむすび
　むすびむすびてものみなに
いのちをあたへあめつちに
　よろづのあやをなしたまふ
さればものみなあめつちは
　みなおほかみのみこにして

なかにもひとはおほかみの
　いとをしみますまなごなり
しかればひとはとりわきて
　かみのこころをこころとし
かみのみちをばまもるべし
　ひとのみちをばはげむべし

（以下嗣出）

神國教典 終

274
840

不許複製

大正三年五月十三日印刷
大正三年五月十六日發行

著作兼發行者　井口丑二　東京市芝區白金今里町七十七番地

發行所　眞樂園　東京市芝區白金今里町七十七番地

印刷人　島連太郎　東京市神田區美土代町三丁目一番地

印刷所　三秀舍　東京市神田區美土代町三丁目一番地

終

東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）